第４回「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）【佳作】

「千鳥病院三階コスモス病棟」　　愛知県　松原　凛

なんか、うんこの匂いする。仕事帰りに雄大の部屋に寄ったとき、雄大が私を見てそう言った。

「は？　何いきなり」

「いや、まじでお前うんこの匂いするから。彼女の体臭がうんことか無理だから」

「じゃあ、今日は帰るよ」

私は顔をしかめて言ったが、雄大は聞く耳を持たず、さらにまくし立てる。

「てかさあ、前からちょいちょいあったんだよね。我慢してたけど。うんこの匂いする彼女と付き合うのとか、なんの耐久レースだよ。いますぐ出てってくんない部屋に匂いつくから。荷物は全部美弥んち郵送するわ」

あまりに唐突に、うんこうんこ連呼されすぎて、自分までうんこになったように感じた。

私はショックでくらくらとなりながら、鼻に袖を近づけて服の匂いを嗅いでみた。何の匂いもしなかった。雄大の部屋では雄大の匂いを感じられるのに。この匂いはもう、何も感じられないぐらい私の体に染み込んでいるのだった。

私の職場は千鳥病院終末期患者入院病棟、通称『コスモス病棟』。看護師になって二年目、患者も職員も顔を覚えるか覚えないかのうちに、ばたばたと頻繁に入れ替わる、しんどいと有名なこの病棟に配属された。

三階全体がコスモス病棟で、ナースステーション横の壁には田中清という画家の『陽光の道』という油絵がかけられている。立派な額の中で、かごに入ったピンクや紫のコスモスが風に揺れている。以前入院していた患者さんの家族から贈られたものらしい。

働きはじめたばかりの頃は、三階.に上がるたびに息が詰まった。清潔と腐敗を閉じ込めたような匂いが、この病棟の部屋や通路、あらゆる隙間に染み込んでいた。でもその匂いは毎日ここで働いている人たちには何も感じない日常の匂いだった。そして日々の忙しさに追われて、私もすぐに気にならなくなった。

排泄のたびにベッドが便まみれになる患者がいる。清下さんという八十七歳の、認知症がかなり進行している男性で、自分でトイレに行くことができず、便意を感じないため排泄を自然にできない。三日に一度、下剤で強引に便を出すのだが、あまりに多量で、毎回おむつをはみ出し、パジャマと肌着、布団まで汚してしまうので後始末が大変だった。

清下さんと同室の患者は皆ほぼ寝たきりで苦情はこないが、見舞いに来た家族からは決まって嫌な顔をされる。朝から布団を取り替え、便にまみれた体を拭き、臭いと詰られ、看護師だって人間だ、へこむことだってある。いちいち気にしてたら身が持たないよとパート歴十年の沙知絵さんに言われるけれど、あと何回私は便を拭けばそんな鋼鉄の心臓になれるのだろう。

センサーマットのけたたましい音を聞いて駆けつけると、藤田さんが床に四つん這いになって子鹿のように震えていた。

「藤田さん！　大丈夫ですか」

　痩せ細った体を抱えてベッドに戻す。

「トイレ行こうとしたらつまずいちゃって……あーやだやだ。嫁の嫌がらせを思い出すよ」

　藤田さんはベッドに座り直してぷりぷり怒っている。

「藤田さん。トイレ行きましょうか]

「あ、トイレね。そうだった、そうだった」

　藤田さんは脳梗塞の後遺症で下半身がほとんど動かず、さらに脳に悪性の腫瘍がある。かなり進行していて、すでに手術で取り除くことはできない段階だった。最初の頃は痛み止めの副作用で意識が朦朧として会話もままならなかったが、最近は薬に慣れてきたのか調子がよく、会話もできるようになった。しかし上半身だけ動けるために、たびたびベッドから落ちて戻れなくなり、一日に何度もセンサーマットを鳴らしている。

　車椅子に乗せてトイレまで行き、介助をしながら用を足すと、ありがとうね、と藤田さんはすっきりした顔でベッドに横になった。

　大部屋の前を通りかかると、歌声が聞こえてきた。

　十月の終わりにコスモス病棟でカラオケ大会がある。優勝者には景品もあり、患者さんたちは気合いが入っている。私はカラオケ大会のレクリエーション担当だ。当日まで一ヶ月足らず、張り紙を作ったり楽譜が必要な患者に印刷して配ったりと、雑務に追われている。

「頑張ってますね」

　私は顔を出して言った。

「あっ、美弥ちゃん。ちょっと聞いてってよ」

招かれて病室に入り、おばあちゃん四人組の前に椅子を置いて座った。

余命を宣告されているなんて思えない、はきはきとした元気な歌声だった。それでもみんな理由があるからここにいるのだと考えだすと涙ぐみそうになるから、私はただそこに座って、歌声に耳を傾けていた。

「よろしくお願いします」

タオルやティッシュが入ったビニール袋をサイドテーブルに置いて、中年女性がぶっきらぼうに言う。かちっとした紺色のスーツを着て、肩までの髪を飴色のバレッタで留めている。

寝ている藤田さんにちらりと目を向けると

「じゃあまた何かあれば電話で」と言い残し、　足早に出ていった。

「相変わらず嫌な感じだねえ、あの嫁は。看護師さんにお礼の一つも言えないのかね」

藤田さんがむくりと起き上がって言った。

「起きてたんですか」

「話すことなんてないからね。あの嫁、あたしのこと臭いって言ったんだ。おむつの匂いが臭くてたまらないからどうにかしてくれってさ」

「藤田さんにですか？」

「いや、息子にだけどね。息子があたしに言うんだよ。そういうわけだから悪いけど家では見れないんだって。あの子は嫁の言いなりだからね」

「それ……匂いだけじゃないかも」

そうつぶやいてから失言だったと気づく。これじゃあまるでお嫁さんが藤田さんに出て行

ってほしかったと言っているようなものだ。

　しかし藤田さんはいたずらな少女のように、にかっと口を広げて

「それなら思い当たることがありすぎるくらいあるね」

　笑いながらそう言った。

　朝、清下さんのベッドがまた茶色に染まった。今日はとくに、しゃびしゃびで床にまで垂れている。筋肉も脂肪も削げ落ち、やせ細ったその体から、どうしてこんなに大量の便が出るのか、目にするたびに不思議になる。

　清下さんは便まみれの体で薄目を開けて、ぼそぼそと何かをつぶやいた。何と言ったのかは聞き取れなかった。

「毎回これじゃあねえ。下剤の量を少なくしてもらえないかな」

　シーツを交換した後、沙知絵さんが言った。

「でも、少なくすると出ないんですよね」

　下剤の回数を多くすると出なくなる。出さないと今度は便が体内に溜まりすぎて、手術でしか出せなくなってしまう。三日に一度のペースが清下さんの体には合っているのだろう。しかし毎回これでは……と看護師たちは頭を抱えていた。

「朝、ヨーグルトを食べさせてみたらどうでしょう」

　ふと思いついて私は言った。

「でも清下さんの食事だけ変えるなんてできないわよ」

「ご家族に相談して、週に一度ヨーグルトを差し入れてもらうとか」

新入りの意見なんて採用されないだろうと思ったが、沙知絵さんが師長に提案してくれ、特例で許可が出た。ただし、毎日少量ずつ食べさせること、という条件つきで。

清下さんの家に連絡を入れると、その日のうちに奥さんがヨーグルトを買ってきて差し入れてくれた。

「お父さん、食べれる？」

清下さんの奥さんが、プラスチックのスプーンですくって清下さんの口に運ぶ。清下さんは口をもごもごと動かしながら、少しずつヨーグルトを食べた。

「おいしい？」

清下さんは答えないが、奥さんは声が聞こえているように、そうかそうかと頷いた。

あれから雄大とは一度も会っていない。このままだめになってしまうんだろうな、と思いながら連絡もできずにいたら、終わりをわかりやすく押しつけるみたいに段ボール箱が届いた。

ハサミでテープを切ってふたを開けると、中から毛玉だらけのスウェットやひざ掛け、ポーチや歯ブラシやコップが出てきた。雄大の部屋に置いておくために揃えた、もう用がなくなってしまった物たち。

その中に見覚えのない物があった。ディオールの黒い口紅だった。ブランドの口紅なんて一度も買ったことがない。キャップを開けて底をひねってみる。濃い紫色の口紅がするりと出てきてぎょっとした。

紫！　こんな魔女みたいな口紅、絶対買わない。雄大が私のために買ったのだろうか。

いや、ホワイトデーのお返しにパチンコの景品のバウムクーヘンを渡す男だ。そんな気がきくはずがない。それなら、入れたのは女だ。こういうときの女の勘は当たるのだ。自分の物の中にうっかり紛れ込んだように知らない女の気配を嗅ぎ取った瞬間、私はそのどぎつい色の口紅をへし折ってやりたくなったが、できなかった。

変なところで貧乏性が発動してしまった。捨てるのはもったいない。といって紫色の口紅なんて使う場面もない。何かいい活用法はないか。どうせなら雄大と女が痛い目を見るようなことがいい。それを陰で見て私は高笑いするのだ。雄大の部屋のドアに思いつく限りの罵詈雑言を書くとか、自慢のワーゲンに下手くそな似顔絵を描くとか。でもマンションや車にラクガキしたりしたら通報されかねない。捕まらないレベルで相手を嫌な気分にさせる方法はないだろうか。口紅で恨みつらみを書き綴った手紙を書いてもいい。いかにも恨んでますという感じがする。でも私はそこまで雄大を恨んでいるのだろうか。

よくわからなかった。二年も一緒にいて結婚まで考えていたのに、自分がどれくらい雄大のことが好きだったのかわからなかった。結婚したいとか一生一緒にいたいなんて、言ったことも言われたこともない。好きだという言葉も最初だけだった。私たちの関係はごまかしようがないほどとっくに冷めていて、毎日欠かさなかった電話が二日に一回になり、三日に一回になり、それでもお互い忙しいのだから仕方がないと言い訳しながらずるずるとやり過ごしてきたのだった。

匂いだけじゃないのは薄々わかっていた。わかっていたけれど、こんな風に突き付けられるのはしゃくだった。

あれこれ仕返しを考えたがどうにも、しっくりこないまま時間は無意味に過ぎてゆく。魔女みたいに濃い紫の口紅はいまも私の鞄の中に裸で転がっている。

入浴が終わって藤田さんに寝間着を着させ、部屋に戻ろうとすると、藤田さんの義娘さんが待ちくたびれたように立っていた。こんにちは、と挨拶すると、彼女は珍しく笑顔を見せた。

「あっ、お義母さん。なかなか来られなくてごめんなさいね。仕事が忙しくて。それでね、病院のレンタルサービスを利用しようと考えてるの」

レンタルサービスとは、部屋着やタオルを業者からレンタルし、クリーニングまで全部委託するというサービスだ。お金はかかるが、そのぶん家族にかかる負担はぐっと減る。千鳥病院では入院患者の約半分がレンタルサービスを利用している。

「いいよいいよ。そっちのほうがお互い楽だしね」

「そうさせてもらいます。また何かあれば電話で」

「わかったから用が済んだらさっさと出てってよ。夕飯が来るから邪魔になるだろ」

彼女は少し顔をしかめて、頭を下げて出ていった。

「藤田さん、お夕食までまだ三十分以上ありますよ」

そう言うと、藤田さんはどうでもよさそうにふんと鼻を鳴らしてベッドに横たわった。

毎日少量のヨーグルトを清下さんに食べさせているが、一ヶ月続けてもこれという変化は見られなかった。相変わらず自力で便を出すことはできず、三日に一度、下剤を飲むたびに

ベッドは便まみれになる。

「健常者みたいに食べ物でどうにかなるレベルではないですよね。わざわざ買ってきてもらうのも大変だし、やっぱり……」

こんなことをしても、意味はないのかもしれない。下剤に頼るしか方法はないのかもしれない。そう思っていたとき

「もう少し続けてみようよ」と沙知絵さんが言った。

「三日に一回の掃除だって、私たちにとっては大変なことだよ。自分で言いだしたんだから貫きなさい」

職員が頻繁に入れ替わるコスモス病棟に十年もいる沙知絵さんの言葉は力強かった。弱気になっていた私の肩を、ぽんと叩いてくれるようだった。

なんかおもしろい話してよと藤田さんに言われて、口紅のことを話したら、意外にも興味津々に乗ってくれた。

「前の女に口紅送りつけるなんて、なかなか図太い女だねえ。そいつは尻に敷かれるね」

完全に面白がられている。

「どこで出会ったの」と藤田さんはついでみたいに尋ねた。

「マッチングアプリです」

「なんだいそれは」

「いま風のお見合いみたいなものです。まずメッセージのやりとりをして、お互いにいいなと思ったら実際に会うんです。最近はそういう出会い方もけっこう多いんですよ」

「へえ、そりゃ便利なお見合いだねえ」

藤田さんは感心するように言う。

「まあきっかけなんてなんでもいいけどさ。別れ際に暴言吐くような男はいつの時代もロクなもんじゃないよ」

たしかにそうですね、と私は笑った。

「でも、おかげでちょっとすっきりしましたけどね。結局そういうことかって」

「そんなこと言って、ほんとはまだちょっと残ってるんだろう。小さいしこりみたいなもんが」

見透かしたように言われて、私は言葉に詰まってしまう。

その通りだった。すっきりなんて全然していない。でもこれは未練なんかじゃない。私は臭いと言われたことに腹を立てているのだ。悔しかった。たとえ別れの口実に過ぎなかったとしても。私だけじゃなく、ここにいる患者さんたちまで貶められたような気がして。

私はまだ新米だけれど、この仕事に誇りを持ってやっている。結婚したって辞めるつもりはない。あんな男と結婚しなくてよかった。

あんな無神経な男と結婚して、将来パンツを洗ったり、お互いもっと歳をとって汚れたパンツを洗ったりすることにならなくてよかった。いまは汚いものにふたをして見ないふりをしているけれど、自分だっていつかは歳をとるのだ、一人でトイレにも行けなくなるのだ、そうなったときに汚物扱いされる気持ちを想像してみろ、と言いたかった。でも彼は現場を見ていないから、近くにいないから、そんなのいつの話だよって鼻で笑うだろう。想像力

がないまま抜け殻のように歳をとればいい。そしていつか笑われる側になればいい。

「美弥ちゃん。口紅の使い道、思いついたよ」

藤田さんが、とっておきのいたずらを思いついたみたいに、にやりと笑って言った。

談話室のテーブルに、大きな紙を広げる。そこに黒のマジックで大きく『コスモス病棟カラオケ大会』と書いた。大きな字なんてあまり書かないので斜めになってしまった。

「大丈夫、大丈夫」

藤田さんはそう言って口紅の底をひねった。

どぎつい紫が顔を出す。そして、字の上にコスモスを描いた。小さな子供がクレヨンで描いたみたいな、いびつなコスモスだった。

「恨みったらしい手紙書くよりずっといいよ。いつまでも恨んでたらあんたが不幸みたいだからね。いつかどっかですれ違ったとき、あんたが幸せそうなのがいちばんの仕返しになるんだよ」

「藤田さん、いいこと言う」

ビッと立てた藤田さんの親指は口紅と同じ紫色に染まっていて、二人で顔を見合わせて笑った。

あ、の、ひっとの、と藤田さんが口ずさむ。

「あ、魔女の宅急便ですね」

「ルージュの伝言。ぴったりだろ」

「ほんとだ」

藤田さんは車椅子で体を伸ばせないので、反対側は私が描いた。紙に押しつけて、ぐりぐりと塗りつぶし、途中で折れて粉々になったりしながら。

素っ気なかった張り紙が紫色のルージュのコスモスで埋まっていく。この中に恨みの気持ちが混ざっているなんて、きっと誰も思わない。それでいい。いつか思い出しもしないくらい幸せになってすれ違うために。さようなら私の恋。

邪悪な魔女のように見えたどぎつさは、紙の上に乗せると、拍子抜けするくらい何の変哲もない紫だった。

清下さんのおむつの中に、うっすら茶色い染みがついていた。今日も真っ白だろうと思いながらおむつ替えをしていた私は目を見開き

「出た！　出ました！」

お宝を発見したかのように叫んだ。沙知絵さんが飛んできた。

「やったわね！」

「やりましたね！」

ヨーグルトを少しずつあげ続けて一ヶ月かかった。医療行為でもなんでもない、ただ食事をちょっと変えただけ。それ以外に方法は思いつかなかったが、こんなことをしても意味はないんじゃないかと布団を取り換えるたび思った。でも、下剤がなくても便が出た。

おむつから、はみ出すどころか、ちょっと漏れたくらいの量だけど。

人の便を見て喜べる職場は、どこにでもあるものじゃない。人の生活に深く関わっている

から、人の体の些細な変化に悩んだり喜んだりできるのだ。臭くても、汚くても、人に嫌な顔をされても、私はこの瞬間のために働いている。茶色の染みがついたおむつは、やっぱり臭くて、私はおむつを取り替えながら一人、また笑った。

土砂降りの夜、バタバタと窓を叩く雨音に混じって救急車のサイレンが聞こえた。三、四台はいる。サイレンはうねるように響きながらだんだん近づいてくる。夜勤でナースステーションで仕事をしていたとき、センサーマットの音が聞こえた。藤田さんの部屋だ。

急いで駆けつけると、下半身がベッドからずり落ちている藤田さんが、頭だけこちらに向けて弱々しく笑う。

「いつも悪いねえ。ちょっと寝返り打っただけですぐこれだもん。嫌んなるよ」

「大丈夫ですよ。困ったときは遠慮なく呼んでください」

藤田さんはベッドに腰掛け、横にならずに窓の外を眺めた。

「どっかで事故でもあったのかねえ」

ぽつりとつぶやく。暗がりで表情はよく見えない。

「すごい雨ですもんね」

大粒の雨で滲む窓ガラスに赤い光がぼんやりと滲んでいる。

「そうそう美弥ちゃん。そこに入ってるあたしの鞄とってくれる？」

言われて、私は棚の扉を開けて鞄を取り出した。いまはもうできないが、刺繍が得意だった藤田さんが作ったという、金色のビーズが花柄に縫い付けられた黒い鞄だ。その中には藤田さんの大事なものが全て入っている。

藤田さんは鞄の中をごそごそと探って、何かを取り出した。

「これ、あんたにあげる」

手のひらを広げる。小さな、金色のコインだった。何のコインかはわからない。暗い部屋の中で、それは月明かりのようにきらりと輝いた。

「えっ、もらえませんよ。藤田さんの大切なものでしょう」

「大切だからあげるんだよ。ろくに顔も見せない息子や人を汚物みたいに言う嫁より、いまじゃあんたのほうがずっと身近に感じるからね。まだあたしの頭がまともなうちにもらっといてよ。現金じゃなきゃあげたっていいだろ。これはきっと価値が出るからね。ちゃんとしたとこで見てもらったから間違いないよ。誰にもらったんだって聞かれたら知り合いのばあさんがくれたんだって言いなさいよ。患者にもらったなんて言ったら盗んだと思われるからね」

藤田さんは半ば無理やり私の制服のポケットにコインを押し込むと、ぱたりとベッドに倒れ、そのまま気持ちよさそうに寝息をたてはじめた。

明け方に藤田さんの心拍が急変し、当直の医師がやってきて家族に連絡するように伝えた。土砂降りの雨の中、一時間後にやってきた息子夫婦と孫夫婦とひ孫がベッドを囲み、血色がなくなり目をつむっている藤田さんへ口々に声をかけた。母さん。みんな来たよ。聞こえてるか。目覚ましてよ。母さん。お義母さん。ばあちゃん。おばあちゃん。みんな泣いている。息子も孫も、ひたすら事務的な態度を崩さなかった義娘さんまで、涙を浮かべている。最後だから、もう、後はないとわかっているから。

入院してからしばらく虚ろ虚ろとしていた藤田さんは、ここ最近は病気を忘れたように元気だった。今日はとくによくしゃべった。いつもならとっくに寝ている時間、窓の外をぼんやりと見つめ、すぐそこにいるのに、どこか遠くに行ってしまったようだった。

最後に孫一家が到着してから藤田さんが息をひきとるまで五分とかからなかった。それはきっと、藤田さんが最後に家族のために残していた五分間だった。

医師が臨終を伝えて病室を去ってから、息子さんが目を赤くして藤田さんの痩せ細った手を握った。

「母さん……全然来れなくてごめんな。もっといっぱい顔見とけばよかったなあ……」

私は扉の前に立ち、黙って嗚咽を聞いていた。

みんな、そう言う。ここに入院している人の家族は、いなくなったとき、こんなに早く逝くなんて、もっと来ればよかった、ごめんね、と口を揃えて言う。もうすぐ死ぬことがわかっているからここにいるのに、現実から目を背けてきた結果なのに。だけどいざそのときにならないと、その人がいなくなるということが、本当には想像できない。想像力がない、でもそれだけでもない、その人がいることが当たり前だと思っているから。

私もそうだった。中学の頃、大好きだった祖母を看取った。受験勉強を理由に、見舞いにはめったに行かなかった。祖母の呼吸が止まり、閉じられたその目がもう二度と開くことはないのだと知ってからやっと、猛烈に後悔した。どうしてもっと来なかったのだろう。もっとたくさん話をしなかったのだろう。

進んで病院に行ったことは一度もなかった。受験勉強なんて言い訳に過ぎなかった。本当は、ここに来たくなかった。ここは死んだ人の匂いがするから。

でも、そうじゃなかった。ここにあるのは死んだ人の匂いじゃない。排泄物や、ご飯の食べ残し、飲み込めず吐き出したもの。それらは決してきれいでもいい匂いでもないけれど、ここにいる人たちが、毎日、食べて、寝て、排泄しながら、残された時間を懸命に生きている匂いだった。寝たきりで動けなくても意思疎通ができなくても、ここには死んだ人は一人もいなかった。

私は彼らの背中を眺めながら、藤田さんにもらったコインを手のひらに乗せた。夜の病室で金色に輝いていたコインはおもちゃのように軽く、表面のメッキが剥がれていた。可愛らしいイルカの絵が描かれた、水族館の記念コインだった。

藤田さんは、ずっと、待っていた。もしかしたらこのコインを、まだ小さなひ孫にあげたくてずっと持っていたのかもしれなかった。絶対にそんなことは口にしなかったけれど、毎日見ていたからわかった。会いに来なくていいと言いながら、藤田さんがずっと家族に会いたがっていたこと。でも会えたのは、呼吸が乱れほとんど意識を保てなくなった最後の五分だけだった。会話もできなかった。最後に伝えたいことがあったはずなのに。私は手の中で、メッキがはがれたコインを強く握りしめていた。

藤田さんがいたベッドは半日もすると新しいシーツに取り替えられ、荷物もすべてなくなった。藤田さんが刺繍をした花柄のビーズの鞄は息子さんが大事そうに折りたたんで持って帰った。

「村瀬さん、包帯緩んでるから巻き直しますね」

私はベッド脇に屈んで言った。村瀬さんは、藤田さんの後に入ってきた患者だ。抗がん剤

の副作用と認知症でぼうっとしていることが多い。

「あい、包帯」

村瀬さんが差し出したものを見て、立ち上がりかけた私は笑った。

「それはトイレットペーパーですね」

「あれぇ？」

村瀬さんは不思議そうな顔をして、えへへ、と笑った。前に藤田さんも、サイドテーブルに置いてあったトイレットペーパーを包帯と間違えて渡してくれたことがあった。その親切さと、可愛らしい仕草を思い出して、目の奥がじんと熱くなった。

コスモス病棟はつねに待ちでいっぱいだった。一人いなくなったらすぐ、新しい患者が入ってくる。一人がいなくなっても悲しみに浸っている暇はない。だけど何度繰り返しても、この痛みだけは慣れる気がしない。慣れたいとも思わない。その痛みは、その人がここにいて、生きていた証だから。

十月も終わりに近づき、涼しさを感じる日が多くなってきた。世間はハロウィンで盛り上がる季節だが、千鳥病院三階コスモス病棟のレクリエーション室では、外の空気などお構いなく、朝からカラオケ大会で盛り上がっている。皆入院着で、腕には点滴、下は車椅子、背中が曲がって痩せ細った体から、声をだす。観客は起き上がる元気のある患者と介護スタッフとリハビリスタッフを合わせて二十人ほど。椅子をずらりと並べて、その前に特設ステージを用意した。

おばあちゃん四人組が楽譜を持ってステージに立つ。

「コスモス四姉妹『リンゴの唄』を歌います」

病棟カラオケ大会ではおなじみの、軽快なリズムの音楽が流れだした。

「あーかぁーいーりんーごーにぃぃくちびぃぃるよぉせぇてぇぇぇ」

観客たちは楽しそうに手拍子をし、体を揺らしている。清下さんも、車椅子に点滴をつけて、付添いの奥さんと一緒に参加している。表情に変化はないけれど、わずかに首が動いているから、きっと聞いているのだと思う。

藤田さんの席もある。人前に立って歌うなんて恥ずかしいから嫌だよ、と言っていたけれど、歌が好きな藤田さんは、カラオケ大会を楽しみにしていた。きっと、一番後ろの席に座って、ゆらりゆらり、体を揺らしているだろう。

カラオケ大会の張り紙の上で、咲き誇るルージュのコスモスも、楽しそうに揺れていた。